2024年度 第２回 豊岡市子ども・子育て会議　議事要旨

日時　　2024年７月８日（月）　13時30分～15時30分

場所　　豊岡稽古堂　３階　交流室

出席者（委員）　水落会長、曽根副会長、天野委員、一ノ尾委員、大友委員、川島委員、渋谷委員、鈴木委員、田中委員、戸田委員、永田委員、西垣委員、三輪委員、森本委員、吉岡委員

（事務局）　永井部長、若森課長、佐伯参事、福田主幹、山崎主幹、谷垣係長、吉本課長、鳥居所長、道下課長補佐、中村主幹、向原課長、三輪参事、谷口参事、谷垣課長補佐、樋口主幹、磯係長、((株)名豊　大川、吉川)

欠席者（委員）　上坂委員、水田委員

会議次第

１　開会

２　部長あいさつ

３　委員の任命（辞令交付）

４　正副会長選出

５　議事

⑴　報告

ア　幼稚園・保育所・認定こども園の利用状況について　資料２－１～２

イ　放課後児童クラブの利用状況等について　資料３

ウ　地域子ども・子育て支援事業の取組状況について　資料４

エ　子育て世帯アンケート分析結果概要について　資料５

オ　合計特殊出生率向上施策などに関する研究報告について　資料６

⑵　協議

ア　特に取り組むべきこども施策について　資料７－１～７

⑶　意見交換

６　その他

⑴　次回の会議日程

⑵　今後の会議日程（予定）

⑶　その他

７　閉会

配布資料

資料１　豊岡市子ども・子育て会議委員名簿

資料２－１　幼稚園の入園状況

資料２－２　保育所・認定こども園の入園状況

資料３　放課後児童クラブの利用状況等

資料４　地域子ども・子育て支援事業の取組状況

資料５　豊岡市子ども・子育て支援のニーズに関するアンケート調査結果報告書（概要版）

資料６　合計特殊出生率向上施策などに関する研究報告

資料７－１　特に取り組むべきこども施策

資料７－２　豊岡市こども計画施策体系（案）

資料７－３　豊岡市まちづくりアンケートから見える課題

資料７－４　出生数とサポートが必要な家庭数

資料７－５　豊岡市乳幼児健診時アンケートから見える課題

資料７－６　不登校児童生徒数の推移

資料７－７　児童虐待の状況（豊岡市）

参考資料１　豊岡市子ども・子育て会議条例

参考資料２　豊岡市子ども・子育て会議傍聴要綱

別添資料１　豊岡市子ども・子育て支援のニーズに関するアンケート調査結果報告書

議事要旨

1　開会	開会の宣言（事務局）
2　部長あいさつ	こども未来部長あいさつ
3　委員の任命	辞令交付（机上配布）
4　正副会長選出	委員の互選により、会長に水落委員、副会長に曽根委員を選出

5　議事

⑴　報告

事務局　**エ　子育て世帯アンケート分析結果概要について**　資料５

会長　資料が多いため、時間を取りたい。

委員　30ページ（２）に「日曜日・祝日※2023年度現在、豊岡市には休日保育所はありません。」とあるが、休日保育所の定義はどういう定義か。城崎こども園では、休日保育事業を行っているが、その保育所はないというのはどういう定義か。

事務局　調べて、後ほど回答する。

委員　37ページ（８）「満足度、自由意見等について」。前回の調査と比較すると「満足度が低い」の１，２の割合は増加し、３，４の割合が減少している。要するに、満足度が低くなったとここには出ているということ。それが一つ。

それと、11ページのところ。支援事業の利用状況については、「利用してない」というところが、必要がないということだと思う。利用が進んでないという結果が出ているようだが、これに対して事務局の方はどういう理由が考えられるのか。以上２点。

会長　では、今の２点に関して、もしかしたら今現時点でのお考えかもしれないが、そういった解釈も含めて説明いただければと思う。

事務局　通し番号ページ55、事業内37ページ問23の関係。ご指摘の通り、満足度は低くなっている。確かに「満足度が低い」が、9.4から19.9に５倍になっているので、低くなっている。３，４も減っている状況だ。これはなぜかというのは、今この時点では、わからない。ただ満足度が減っているのだなということを、今このアンケートで承知したと、そういう状況だ。

通しの29ページに、今は利用していないが、できれば今後利用したいとある。未就学の親の方に聞いているところで、現時点では、こういった数字が出ているなということを確認したという段階で、利用してない方が利用したいという、この20％の保護者の方にどう利用してもらうのかというところ。そして、新たに利用したい、利用日数を増やしたいとは思わないという61％の方には、どうしたら使ってもらえるのかを考えたい。未就学のお子さんなので、５年前よりも、園に入っている方が増えていると思う。その辺も踏まえて、どういった形であるべきなのかというのは今後の検討課題だと感じている。

会長　やはりなかなかその結果の解釈というところまでは、現時点ではかなり難しいのかなと思っている。今取ったデータの現状を踏まえて、今後どのようにしていくか、その辺りについて議論を後半の部分で実施していけたらなと思う。

もしデータの部分に何かこれはどういうことかっていうのがわからなかったりした場合は、質問等いただければと思っている。

委員　今回、この調査に私も未就学児の保護者で答えさせてもらった。今出た11ページの解釈なのだが、子どもは未就学でも地域と繋がりたくて、働きに出ておられる親御さんが徐々に増えているのかな、現在そんな状況だ。利用はしてないが、夏休みだったり、これから仕事や、こういうこともやってみたいとチャレンジしようと思ったら、休日のファミリーサポートさんとか利用してチャレンジしていきたいっていう、いろんな思いがあったりするのかなと思って見させてもらった。

委員　質問ではなく感想で。まず、先ほど他の委員から指摘があった、「子育ての環境や支援の満足度について」のところが前回よりも「満足度が低い」の割合が増加しているのことについて。京都府全域で同じような調査を過去にしたことがあったようだ。例えば京都府ならば、「京都府の子育ての環境や支援について満足しているか。」という質問の後に、満足していないと答えた人に対して、具体的に、どこに満足していないかを聞いている。

例えば、市町村独自の児童手当の割合が低いとか、もっと近くに公園を作ってほしいとか、もっと親子で通える場所を作ってほしいとか、そういった具体的な意見に関して、あなたはこの項目に関してどう思うか、というような質問をしている。単に満足度が低いだけではなく、どうして満足度が低いのかということを今後のアンケートでは聞いていくと対策が練りやすいのかなと思った。これは推察だが、兵庫県内は、明石市が非常に子育て支援が有名で、いわゆる市による手厚い児童への手当、具体的に言うと給食費を無料にしたり、医療費を安くしたり、そういったことしておられる。別に豊岡がすごくその子育て環境への支援が悪いというわけではないが、同じ兵庫県内だから、進んだところと比較して、もっとやってほしいというような意見の部分もあるのかなと思いながら拝見した。

また、父親の育児休暇取得率が9.6％で、それが、私にとっては意外だった。私は、豊岡市はジェンダーギャップ対策がすごく進んでいて、例えば中田工芸の取組みなどをいつも学生に紹介しており、中田工芸は社長自ら育児休暇を取って、多くの男性社員が育児休暇を取っていることで有名な会社なので、豊岡市のほかの会社もそうなのかなと思ったらそうでもないのだなと思った。

日本の男性の育児休暇取得率は、先進国中、残念ながら最下位なのだが、ここのところすごく上がってはきていて、日本全体で言うと昨年度が確か17％程度だったと思う。一昨年度の、あるいはその前の年度の12％ぐらいから急に飛躍的に伸び、伸びたと言っても17％なのだが、そのパーセンテージから言うと半分強ぐらいの男性しかまだ育児休暇を取得していないのだなというのは少し残念かなと思った。ただ、市役所の中では、非常に多くの方が育児休暇を取得していると聞いている。そういった市役所内での取組みが市内全域の企業にも広がっていくといいと思った。

会長　今後、そのようにもう少し深掘りできるようなアンケートの作成であったり、今回も自由記述等も取っているので、そういった質的分析であったり、また、類似した市や様々な政策を取り入れているような市との比較から子育て支援というものを模索していったり、また育児休暇の部分に関しても、より広げていけるようなことを考えていったりできればと思う。

委員　先ほどの満足度の件。１つは、おそらく、この満足度によってどうこう変えていくというのは、あまり考える必要はないのかなと思った。というのは、満足度が低いからなんとかしなきゃというのは、あくまで保護者の満足度があって、子どもにとって本来大事なものが保護者の利益と重なるかというと、決してそんなことはない。本来であれば子どもにとって子どもの満足度を出してもらえたら１番ありがたい。それは難しいことなので、私としては必ずしもこの満足度が低いからダメというわけではなくて、あくまで１つの参考として、子どもの教育や保育にとって、この政策としてはどうかということはまた別で考えていただく必要があるのかなと思う。あとは、この経済状況が社会全体的にあまりよろしくなくなってきたので、そういったことも反映されているのかなと思う。それこそ全国の似たような調査と比べて、他でも満足度が低くなっていると、同じような状況が豊岡市内でも考えられるのかなと思う。こういう調査、数字に一喜一憂するような必要はないと個人的には思う。

会長　今ご指摘いただいたように、全ての結果ではなくて、あくまでも一部の結果なので、しっかりと全体的に皆さんで議論しながら、検討できればと思っている。

委員　調査方法で回答が、郵送による配布の回収及びウェブによる回答だったが、その割合がどのくらいだったのかが分かれば、知りたい。

事務局　今資料を持ち合わせていないので、後ほど回答する。

会長　では、後ほどということで。では、次に移る。

委員　**オ　合計特殊出生率向上施策などに関する研究報告について**　資料６

会長　今回お話していただいた通り、ソーシャルキャピタルの強化とか地域全体の支援体制の充実が、地域の人口動態とか、社会的な経済的な健全性に寄与するということが期待されるというのが、よく理解できたのではないかなと思っている。そういった中で、今短い時間だったので、聞きたいことが多々あるかと思う。例えば、どうしたら橋渡し型のソーシャルキャピタルを強化することができるかなど、具体的な施策などを聞いてみたいなど。ぜひこの機会に委員に様々な知見についての質問いただければと思う。

では、橋渡し方のソーシャルキャピタルを強化するために、より具体的な施策について他市ではどんなことをされているのか。

委員　先ほど話したように、福知山市の場合はＮＰＯによる子育て支援がかなり効果を上げているという気がする。子育て支援に限らず、一般的なまちづくりだと、地域おこし協力隊という制度がある。地域おこし協力隊の方たちというの

	は外から来られた方たちなので、その人たちが橋渡し的な役割をしていろんなアイデアを出してくれて、町づくりでも成功したり地域経済の活性化にも成功したりしている。その人たちが地域おこし協力隊の任期が終わってから定住をしてくれると、若い人たちが多いので、地元の人と結婚してくれて、子どもが生まれて、合計特殊出生率が上がっていくみたいなこともあるかなと思う。
会長	今回やはり外との関係性というか、壁をいかに取り除きながら、お互いを構築していくがすごく重要だと思う。
委員	はい。
会長	今の子育て支援や地域おこし協力隊以外に、特殊だなと思うようなものを知っているか。
委員	2014年に今の郵政の社長をしている増田さんが、増田レポートというレポートを出している。今、約1,800弱ある市町村のうち、もうすでに855が過疎地だそうだが、約900の市町村が、何もしなければ消滅してしまうというレポートを出したのは、皆さんご存じで、すごく衝撃的だったと思う。昨年、増田さんがまた試算し直していて、なんと900だと言われていたのが、744に減っている。つまりは166の自治体が、消滅可能性市町村から脱出している。その中の１つに、島根県の真ん中辺りにある邑南町という町があり、ここは人口が約１万人。中山間地研究の研究者が経済学の観点から統計を出したところ、その町の人口の約１％の人口を増やすと、その町は持続可能になるっていうデータがある。邑南町なら、１万人だから、100人増やせば持続可能になるわけだ。本当に中国山地に張り付いたような山の中にある町で、閑散とした町だが、やはり自分の町が消えてしまうのは嫌だということで、町の職員が中心になっていろんな政策を練り、2011年くらいから、今、明石市がやっておられるような施策をずっとやってきた。具体的には、２人目以降の保育料を無料にするとか、小学校卒業までの医療費を無料にするとかいうようなことをした。そうすると、都市部から、たくさんの女性がＩターンしてきてくれて、地元の男性と結婚して子どもを産んでくれて、邑南町はここ10年くらいずっと合計特殊出生率が２を超えている。消滅可能性市町村からも脱出した。あるいは、やはり１つだけではダメで、Ａ級グルメ構想という経済政策も一緒にやっている。石見牛というおいしい島根和牛があり、その牛のステーキを出す、潰れた酒蔵を改造したレストランに、広島から集客をして人に来てもらったり、さっき話した地域おこし協力隊の人に、東京から招いたシェフに料理を教えてもらったりして、邑南町内で食べ物屋さんをやって起業するというような施策を取った。すると40件ほど食べ物屋さんが増えて、結果的に100人の人の移住に成功したという事例がある。これは豊岡でも十分応用できる考え方なのかなと思う。豊岡は、最初に話したように、前の市長さんがジェンダーギャップ解消政策を非常に前に押し出されてやられて、もう全国的に有名になっている。実は、このパワーポイントも、2022年に福知山で日本ジェンダー学会の全国大会をやった時のシンポジウムとしての発表の一部をまとめたもの。その時は、基調講演を前の市長さん

	にしていただき、豊岡市のジェンダーギャップ解消政策についてお話いただいた。一般市民の方にも開放して、研究者も一般市民の方も、豊岡市の施策にすごく感心していた。なので、豊岡市は、ある意味そういった改革的なことをする土壌はできているかなという気がしている。一方で、今日のアンケートを拝見すると、ある一部のところはすごく変わっているが、やはりまだ変われないという部分もあるのかなと思っている。そこをうまく融合していくのが今後の施策のポイントになるのかなと思いながら拝見した。
会長	１％の人口をどう増やしていくかという地域としての取り組みと、その周囲の地域とどう円滑に繋がっていくかだと思う。つまり外の人たちをどのように呼び込んでいくかということも、今後やはり豊岡市としても考えていかなければいけないということかと思った。
委員	いわゆる関係人口と言われる人口の増加も含めて、そこに住むわけではないのだけど、昼間来てくれて、お金を落としてくれて経済的波及効果を生んでくれるとか、何かボランティアのような形で中山間地域に関わってくれるとか、そういった人を呼び込むことも１つの手なのかなと思う。
会長	やはり波紋効果も大事である。
委員	先ほど説明しそびれたが、日本は父親の家事育児参画率が先進国中最下位だ。それが、女性が結婚したくないと思う理由の１つになっていて、それが合計特殊出生率を下げている可能性も高いと言われている。そして、父親の家事育児参画率が高い国は、デンマーク、ノルウェー、フィンランド、スウェーデンもそうだが、１番北極に近いアイスランドは世界一ジェンダーギャップが少ない国だと言われている。豊岡がどうなのかは、私もまだ把握してないが、お父さんの家事育児参画率が高くなることは、すなわち合計特殊出生率が高くなることに繋がっていく可能性は極めて高くて、そういった運動も、今後していく必要があるのかなと思う。
会長	続いての⑵協議の部分で、今の委員の話や事務局からアンケートの説明を踏まえて協議していけたらなと思っている。
委員	例えば、地縁の結びつきが強すぎて入ってこられないみたいなことはあるのか。
委員	あると思う。豊岡市がすごいなと思うのは、前の市長が、今のように豊岡市が消滅してしまうと困るため人口をある程度増やさないといけないということを考えた時に、若者回復率をみて衝撃を受けたそうだ。この話、ご存じの方もたくさんいると思うが。そうすると、男性は半分ぐらいがＵターンできているのに、女性がＵターンできていないことが分かった。女性が帰ってきてくれないことには、子どもを産んでもらえないので、人口が増えない。帰ってこられなかった女性に、どうして帰ってこられなかったのかを聞いたら、１つには、「雇用がない。仕事があれば帰ってこられるのに。」という声があったので、女性の雇用施策を充実させた。もう１点は、「すごく窮屈だ。」と、さっきおっしゃっていたような地縁が強いことで非常に窮屈だと感じることがある。ま

	た、ジェンダーギャップがすごく強いこともあった。例えば、町内会の会合で、女は黙っていろと言われて女性は黙ってなきゃいけないと思って発言できないこともある。そもそも、町内会長んが、日本って女性はすごく少ない。いたとしても１人とか。今はもう変わったのかもしれないが、去年か一昨年まで豊岡も１人もいなかったと伺った。本当は、自分はできる、やりたいと思っているけど、女性がリーダーになることを嫌う土壌があると、帰りにくく思ったりする。一方で、日本は比較的ジェンダーギャップが強いわけだが、それでも都市にいればそこが薄まるので帰りたくないという女性が多いということが分かった。なので、ジェンダーギャップをなくしていく政策を行わなければいけないということで、ジェンダーギャップ対策室を作られ、この４月からジェンダーギャップ対策課に昇格されたと聞いている。よって、結合型ソーシャルキャピタルにはいい部分もあるが、負の部分があることは事実。 　結合型キャピタルだけではなく、橋渡し的な繋がりを作るものも同時に作ると、その結合型のよくないところが緩和されるのかなというのが私の持論。
委員	実は私、３月まで400件近くのそういうコミュニティの区長をしていた。結合型ソーシャルキャピタルに１つ噛んでおり、その時に少し困ったことがあった。例えばソフトボール大会を地区でやろうと言って、みんな盛り上げようとしていた時に、転入してきた割と若い方たちと、中年や私らのようなおじいちゃん世代の人とでは、世代ギャップがあってなかなかつながってこない。それこそ区でバレーやソフトボールのチームを作ろうとしていた時も、私らの年代は集まれないので、若い方にも来るように言っても、なかなかチームが組めないことがあった。コロナのせいもあったが、ギャップもあって。それをなんとか、今年はだいぶ盛り返して。そういった転入者がいるからコミュニティができる、繋がりができるっていうことでもない。いろんなギャップが、それぞれいろんな考え方が、今、多様性なので、なかなかまとめきれないということ。これは結合型のソーシャルキャピタルという私らがやっていた１つの課題だが、「みんなで盛り上がろう」ということになかなか繋がっていかないというのが１つ課題だった。別に意見とかではないが、自分の感想として今お聞きしました。 　もう１つは、この間、土曜日にうちの保育園でイベントをするからと言って、あるお父さんに声をかけた。しかしそのお奥さんは、今、つわりがひどくて休んで入院されていて。結局、お父さんは「休みを取れないので、もうその日はいけない。」と言われた。私が「育休とか産休とか取れないのか。」と言っても、やはり企業によってはなかなかそういう理解ができないこともあるようだ。中には、有給ではなくて、無給の特別休暇になるとは思うのだが、なかなか手続き的に難しいということが、ついこの間だが、あった。先ほど先生の話の中に、金銭的な補助をしてあげたらもっと男性が休めるようになるという話もあった。ぜひ、そういうことができるのであれば、市としてもなんとかやっていただきたいなと思う。そしたら、子どもたちを親子で、夫婦で育てていくという

	正常な形の子育てができていくのではないかなと思った。
委員	先ほども話したが、ＪＲ江原の駅前に、中田工芸という木製ハンガーを作っている会社がある。そこの社長は、長男が生まれた時には育児休暇が取れなかったそうだが、次男が生まれた時に、自ら育児休暇を取ったそうだ。お父さんが育児休暇取るきっかけが、１人目の時はまだお母さんだけで、なんとかなるにしても、２人になると、上の子が家の中走っている状態で、赤ちゃん抱っこして追っかけないといけないので、大変そうだから取ったみたいな話がある。次男が生まれた時に社員の前で「僕は育児休暇を取る。皆さんよろしく。」と宣言されて、本当に育児休暇を取って、社長が休んでしまわれた。それがきっかけで社長が取っているなら僕らも取ろうという空気が、会社の中に生まれて、次々男性社員が取るようになった。そういった取り組みを豊岡市内で、講演とかもしていらっしゃるようだ。 実は、経済的な観点で話をすると、父親の育児休暇取得率が高い国、そして、女性の就業率が高い国は、経済的に発展している。皆さんご存じと思うが、ジェンダーギャップ指数というのが、年に１回発表される。あれを発表しているところは、世界経済フォーラムというところ。なぜ経済フォーラムが発表するのか。それは、ジェンダーギャップがない国にしないと、経済が発展しないから。だから最初は、「お父さんが育児休暇を取るなんて。」という意識が、田舎に行けば行くほどあると思うが、実はそれは逆で、中小企業であっても、父親が育児休暇を取ることは、その会社の収益アップに繋がるっていうことが、中田工芸もそうだが、ほぼほぼどこの会社でも証明されている。そういうことを市の方もすでにアピールしていると思うが、よりアピールすると変わってくるのかなと思う。 さきほどのスポーツのクラブなどの結合型ソーシャルキャピタルの弊害をどうやって解決していくかとか、どういう風にして若い人を巻き込んでいくかということは、一重にやっぱり危機感によって違ってくるのではないかなと思っている。まだ豊岡市、そこそこ人口があるわけだが、より人口が少ないところに行くと、本当にこの町は消滅してしまうかもしれないという危機感をすごく持っているところがある。 例えば、具体的な例を言うと、島根県の隠岐の島に海士町というところがある。この海士町という町、本当に離島。私も夫の仕事の関係で、隣の西ノ島というところに住んだことがあるが、当時、西ノ島にはまだ診療所があったのだが、海士町がある中ノ島という島には、お医者さんが１人もいなかった。西ノ島も産婦人科のお医者さんがおられなかったので、私は次男を生む時には本土の松江に帰らざるを得なかった。中ノ島で子どもを産むことはできないし、病気になった時には、西ノ島まで行かないといけない。隣の島後という大きな島があるのだが、そこまで行くのは１日仕事だ。だから亡くなってしまう人とか、出産で親子ともに亡くなってしまうということもすごくあった。ところが今、海士町、ものすごく全国的に注目されていて、大人のＩターン者もすごく多い

し、消滅寸前だった隠岐島前高校という高校を、ソニーの元社員が移住して、高校コーディネーターという仕事について立て直した。今、それが島根県全域に広がっていて、高校留学という形で、県外から本当に消えかかっていた高校にいっぱい人を呼んで立て直しているということをしている。このキーパーソンになったのが、先ほど述べたソニーから来た社員だが、引っ張ってきたのは誰かというと、もうお亡くなりになったが、当時の山内という町長だ。山内町長には、「隠岐島前高校がなくなったら、島の子どもたちは中学を卒業したら絶対島を出なければいけなくなる。それはまずい。ますます子どもが消えていく。」という危機感があって、なんとか隠岐島前高校を盛り返したいという気持ちで、その橋渡しがソーシャルキャピタルに該当するキーパーソンを、ソニーを辞めさせて無理やり引っ張ってきて、移住させてしまった。それが大成功して、大人にも波及して、今どんどん人口が増えているという結果になっている。おそらく豊岡市よりはもっと状況がひどかった海士町を盛り直している。その地域ごとに、ソーシャルキャピタルの質は違うので、地域性を把握しながら、いろんなアイデアを出してやっていくことが大事なのではないかと思う。

会長　まだまだ聞きたいことがあるかと思うが、時間も差し迫っているので、次に移りたい。

事務局　保留になっていた質問に回答する。まず、ウェブの回答率。43.9％で、未就学が43.8％、小学生43.9％でとんとん。もう１件、休日保育所の件について説明する。城崎こども園では休日、小さい子供を預かっておられる。ここにはないと書いてあるが、それは休日保育の定義をきちんと市の方が整理できてなかったということと、これは少しお詫びなのだが、前回も同じ尋ね方をしていて、設問をそのまま流してしまったところがある。ニーズの把握については、実際にやっていることを勘案した上でニーズを考えていきたいと思っている。

⑵　協議　**ア　特に取り組むべきこども施策について**　資料７－１～７

事務局　今の事務局の説明を受けて、小中学生のアンケートと、若者アンケートの結果はまだ出てきてないが、豊岡市こども計画の５年間の期間で、特に重点的に取り組むべき課題とその施策について意見交換をしていきたいと思う。

会長

委員　先ほどのアンケート結果にもよるが、保護者の満足度が子どもにとっていいかどうかは話し合っていた。ただ他方で、子育てのしやすさというのは、やはり保護者の気持ちが非常に大きいことではある。仕事と子育ての両立が困難というところが１番最初に書いてある。その辺りが結局この６番の子どもの数の理想との乖離というところとも関連してくるので、子ども子育て会議として、アンケートに基づいて考えると、やはり子育てがしやすいというところが１番ベースであると思う。仕事とどう両立をどうしていくのか、保護者が子育てしやすい環境をどう設定するのかというところで、具体的な施策例が書いてある。

あとは、この助成金をどう充実していくか。ただ、予算があるものばかりに

	なると思うので、市として子どもや子育てに関することに、今以上の資金、税金を投入していただけるのかどうかことについて。あくまで現状が、全体としてはまだまだだというアンケート結果であった。なので、何をするのかと言った時に、何をするにしてもしっかりお金と労力をかけるというところが大事になってくるかなと思っている。「こういうことをした方がいい。」と我々の会議で提案があったとしても、「結局お金がありません。しません。」となってしまっては全然意味がないかなと思う。その辺りを、今、どうかと聞かれても答えが出てこないかもしれないが、どういう感じになるのか。
会長	まず子育てのしやすさとは何かということをより具体的に考えて、その課題と、取り組むべき内容について検討すべきだし、やはりそこにはお金と労力がかかってくる。その点に関して、市として今後、予算立てしていく予定があるのか、見通しがあるのかを、ぜひとも考えていただきたいと思っているが、この点に関して、事務局どうか。
事務局	この場で予算の増額が見込めるとは申し上げられない。政策決定の過程で要求することになろうかと思う。確かに、委員ご指摘の通り、助成金にしろ、何かをやるにしろ、お金はかかるものだと思っている。
会長	先ほど、金銭的な支援というところもやはり大事だという話をいただいていたと思うので、ぜひ、市としてもその辺りも含めて予算を立てていくことに、ご尽力いただければと思う。
委員	７番の貧困のところ、７－３に「みらい応援制度」があり、とてもいい制度だなと思うのだが、ひとり親家庭の子どもだけが使えるっていうのがなぜなのかという疑問。ひとり親じゃなくても、「子どもがたくさんいるからイベントに行けない。その１人ずつに300円とかがかかってくるから、劇を見に行きたいけど、ちょっとやめようか。」と言ってやめるお家も多分あると思う。また、法律的にひとり親だからタダで行けているということを、子どもたちが改めて認識することにはならないのかなという風にも思ったのだが、その辺はどうか。いろいろ考え方があるとは思うのだが。
会長	まず１つ説明が必要なのは、ひとり親家庭のみが参加できるのではなぜかというところ。もう１点は、経済的な負担を考えた時に、ひとり親家庭のみではなくて、子どもが多いところも当然そういった貧困的な問題が起きるのではないか、ということを踏まえて今後検討すべきだと捉えているだが、よろしいか。
委員	はい。
会長	この点に関して、事務局、何か説明等あるか。
事務局	元々この制度は、経済的な理由に左右されることなく、文化に触れる機会の均等を図るため、ひとり親家庭の方には補助を出そうという形でスタートしている。現時点、多くの子どもたちがいるということだけでは対象にしていない。根本的な考え方で言うと、子どもたちにいろいろな文化や芸術に触れてほしいということで、経済的な理由だけでその機会を奪うことをクリアするにはどうしたらいいかということを考えた。いろいろな考え方があると思うし、まだま

だ改善の余地はあるかとは思ってはいるが、まずはひとり親への支援の一つとして、このような形で制度をスタートさせるという形になっている。

会長　今の回答でよろしいか。多分、今のお話でも、やはり平均年収のみで考えると、当然ひとり親家庭が１番低くなるのは確かだ。一方で、そうでなくても、質的な要素が影響することによって、結果的に貧困状況が変わらないということも生まれてくる。なので、やはりこれから子育てしやすいまち作りということを考えると、そこに対するケアというのも当然していかなければいけないなと思って今聞いていた。

委員　１番も２番も、子どもたちと地域との関わりという部分では、本当に希薄になってきたなという感じがしている。これはコロナの影響でいろいろな行事ができなかったことも大きいと思う。仲間と一緒に楽しむことをできないまま３年間、４年間過ごしてきて、さあそれを復活させようって言った時に、親に負担がかかるからない方がいい、というように判断基準が変わってきている。今の大人たちが、どんな子どもたちを育てたらいいのかをもっとしっかり持たないといけないといつも思う。そして、もっともっといろいろな人と触れ合ってほしいと思う。そして、仕事をしながら子育てするのは大変だから、自分も頼れる人をたくさん作っていくことが大切。言い方変えたら、自分も頼れる存在になって、みんなが、自分ができることを、人に喜んでもらえることをやっていこうという気持ちが必要だ。しかし今、自分だけが良かったらいいという自己中心的な子育てになりつつあると思う。今こそ、どんな子どもを育てていったらいいのかというところを、もっともっと議論をして、非常に大きな社会の問題である孤立しない、困ったらお隣さん、たくさん子どもにとって居場所があるような育て方というようなものを取り戻していかないといけないなと思う。ちょうど私たちが育った世代と、先ほど委員がおっしゃったように、何かチームを作ってイベントしたい、でも、協力してくれる人が、今の若者は随分考え方が変わったと言われたが、実にそうだ。それは、やはり地域の中で一緒に遊んでないから。やはり子どもにとって遊ぶという体験がいかに大切か。みんな今の子どもの生活見ると忙しくなったと言い、習い事があって本当にバタバタとして、家庭内でも一緒に食卓を囲めないとか、いろいろな課題が出てきている中、もう一度立ち止まって、将来を担う子どもをどんな子どもに育てるのか、地域の中で可愛がってもらえる人に喜んでもらえるような、そんな生き方ができればいいなと私は常に思っている。だから悪いということはないのだけれども、おじいちゃん、おばあちゃん世代と別れて核家族が増えてきたのもそうだ。もっとおじいちゃん、おばあちゃんに頼ったらいいのにと思う。自分は仕事休まなくても、病気になったらおじいちゃんお願いねと言える関係作りができたらいいのに、なぜか核家族になって上手に甘えてはいけない環境とか、家の中にどうしても閉鎖的になって外の風が入らないとか、そういう傾向がある。これはまた不登校とか引きこもりにも繋がるし、今立ち止まって考えていかなければいけないなと感じている。感想だ。

会長	もちろん、地域の関わりが希薄化しているというのは、確かに問題として挙げられているが、他者と関わりを持てるつながりをいかに構築するか、というところと、一方で、その行事の捉え方とか開催の仕方というのも、やはりその判断基準を含めて互いの関わり方を検討していかなければいけないと思う。先ほどその結合型のソーシャルキャピタルの話があったが、結局、内にこもった強さがありすぎると、外の人たちが入りにくい、相談しにくいというところも当然課題として出てくると思う。そうすると、そもそもの関わり方というのを互いに検討していくということが改めて必要になってくる時代だと思われる。
委員	６－２。次代の親の育成支援でプレコンセプションケアの周知とあるが、県の事業でもうされているのか。
事務局	県がホームページを立ち上げて事業はされている。
委員	それはどういう事業か。私は全然知らなかったもので、結局、今の若い人たちに今後の出産とか子育てとかについての情報提供を行うということだと思う。実際、こういうことにどの程度、今の若者、結婚とか出産の前の人たちが参加をして、どういう成果が上がっているのかが分かれば、お伺いしたい。
会長	成果の部分について特に教えてほしいということだと思うが、その点に関して、事務局どうか。
事務局	成果については分かりかねる。情報提供したり、チェックシートでプレコンを始めよう、とか、プレコンセプションケア講師を県内の高校や大学へ派遣する活動がある。中学生に対する教育についてはわかりかねる。
委員	高校ならば県立なので県の管轄かもしれないが、豊岡市としては、例えば中学生とかに対してそういった教育をしようということは全然ないのか。
会長	この点に関して、事務局どうか。
事務局	少し違うが、第２期子ども・子育て支援事業計画に中学生等の育児体験の実施の記載があり、学校教育の中で、中学生に対しての取組みがあると思う。
会長	今の指摘はすごく大事だなと思う。取り組んだ内容とか成果についてはやはり理解しないと、そこからどう取り組んでいけるかというところまで持っていくための基本情報として必要だと思うので、今後そういったことを教えていただければと思う。
委員	６－３。産後しんどい方もあれば、産前のつわりの段階で働けないくらい辛い、核家庭ではやっていけないという方もあると思う。もう既にされておられるのかもしれないが、産後ケア事業と合わせて産前のケアなど、施策ができたらいいのかなと感じたところだ。
会長	まず、今、産後ケアだけじゃなくて、産前のつわり等に関するケアをまず市として取り組んでいるかどうかの確認と、もしやっていないとしたら、そういったことも含めて検討してほしいということでよろしいか。
委員	はい。あとは、いろいろな委員のお話を聞いていて、１番２番に繋がってくると思うのだが、やはり地域のつながりというところの部分だ。先日、不審者情報を学校から連絡でもらった際に、学校お疲れと言われたという情報が来

て、都会での話だと思っていたのでとてもびっくりした。豊岡で、学校お疲れと声かけられたことが不審者情報になってしまうのは、希薄さがすごく課題になってきているなと身近に感じたところだ。以前は子育て広場を各コミュニティでされていたのが、何年か前からか、取り組んでいるコミュニティもあれば、取り組んでないところもある。例えば、ご年配の方のサロンに子育て世代が参加するというようなことをされている地区もあるそうだが、ぜひそういう繋がりができたらいいなと思っている。

会長　先ほどの点に関してだけ、事務局からご回答いただければと思うが、産後のケアに加えて、プラスアルファ何かしらケア等をしているものがあれば教えてほしい。

事務局　市では産前産後サポーター事業というのをしている。妊娠中や産後４か月未満で心身の不調であったり、日中家事・育児で家事の援助をするもので、ぜひご利用いただければと思う。

会長　時間の都合もあるので、皆様のそういったご意見等、内容を踏まえて計画の策定に取り組んでいくということでまとめてよろしいか。

全委員　異議なし。

会長　異議なしとする。次に移る。

⑴　報告

ア　幼稚園・保育所・認定こども園の利用状況について　資料２－１～２

イ　放課後児童クラブの利用状況について　資料３

ウ　地域子ども・子育て支援事業の取組状況について　資料４

会長　こちらに関して、事務局からの説明を省略して質疑を行う。

委員　資料２－２の保育所認定こども園の入園状況の、各年度３月１日現在で、今年度７月１日時点の人数が書かれている。出石愛育園、おさかおのこども園、うちの法人に関してだが、７月１日時点で愛育園は96人、おさかおのは95人しか今現在入園していないが、この数字は７月１日時点ではなく、今年度の入園予定の人数か。

事務局　７月１日時点で見た、３月１日の予定人数である。

委員　入園の予定者で理解した。

会長　他にないか。ないようなので、意見交換に進みたいと思う。

⑶　意見交換

会長　本日、報告や協議事項があった。時間が限られている中ではあるが、せっかくの機会なので、先ほどの議論の流れからでも結構だし、豊岡市のこども子育て支援についてご発言したいということがあればお願いする。

ないようなので、次第の６に移る。

６　その他

⑴　次回の会議日程

事務局　次回の開催は、９月19日（木）13時30分から、大会議室で開催する。

⑵　今後の会議日程（予定） 事務局	次々回以降の開催日程は、記載のとおり。
⑶　その他 会長	その他、全体をとおして何かあるか。 （特になし） 以上で会議を閉じ、進行を事務局にお返しする。
7　閉会	副会長あいさつ